負の連鎖

あれから１０年ほどたった。桃太郎はもう２０歳をすぎ、おじいさん、おばあさんはまだまだ元気だ。そんな桃太郎はというと、平日は会社に勤め、休日は近所の子供を集めて自分の武勇伝を語るという生活を送っていた。

ある日、遠くの村に住むウラシマから

「また鬼が暴れている。」

という情報を入手した。

どうやら理由はわからないが１匹の鬼が怒り狂って暴れているという。

「俺の出番だ。」

桃太郎はそう思い、おじいさんとおばあさんに

「戦ってくる。」

と宣言した。今回は、清水白桃をおばあさんに持たされた。

こうして桃太郎は再び鬼を倒すべくウラシマの住む村へと向かった。

その途中で川上からお椀のようのなものに乗った、小指ほどの「一寸ぼうし」と名乗るものに声をかけられた。

「あの、桃太郎さんですよね。サインいただけますか。」

「なんだ、俺のファンか。」

桃太郎は快くサインを書きわたしたのだった。

一寸は、満面の笑みで川を下っていった。

桃太郎が村に到着すると、鬼は血だらけで横たわっていた。

しかもさっきの小さい人が大きくなっていて、村はお祝いムードだった。桃太郎は訳がわからず少し茶色くなった清水白桃を食べながら、おじいさんとおばあさんの元へ帰ったのだった。

「なんだったんだろう。今日。」桃太郎は思った。

そしてそんなことも忘れかけていたある日のこと、一寸から変なものが届いたと相談を受けた。それは短いメッセージで子供字でこう書かれていた。

**僕のお父さんは一寸ぼうしというヤツに殺されました。**

桃太郎は自分が１０年前の出来事を思い出し、罪悪感でいっぱいになった。